

『倫理学の諸方法』要約

功利主義と常識道徳の関係には、二つの側面がある。功利主義の否定的、あるいは攻撃的な側面は、ベンサム以降よく知られるようになっていく。しかし、かつては功利主義の肯定的側面が主張されていた。カンバーランドがホブズに功利主義的根拠から反対した時、カンバーランドの狙いは保守であり、常識道徳に対する攻撃ではなく擁護であった。シャフツベリの「道徳感覚」や「反省感覚」は、全体の善や幸福の促進を望むように想定されていた。ヒュームは、効用(便利さ)の認識が道徳的愛好の感情の源泉であり、徳とは個人や社会に対する有用さのことであったと考えていた。スミスはヒュームに反対し、是認感情は個人や社会の便利さと自然に適合しているだけであり、本当に問題なのは効用ではなく感情であると主張した。

解説

この段落では、ベンサムに至る「功利主義の先駆者」達の思想が簡単に紹介されており、彼らの主張は、ベンサムの常識道徳に対する主張(ベンサムは常識道徳や自然法を「臆見」や「迷信」と考え、「功利主義に基づく道徳や法律」を唱えた)とは正反対に、常識道徳を擁護していたことが示されている。近世イギリス(スコットランド)の倫理学は日本ではあまり知られていないので、彼らの思想に若干の解説が必要であろう。以下、シジウィックの言及に関連する限りにおいて、彼らの思想を要約した。

カンバーランド[Richard Cumberland 1632-1718]

主著:『自然法に関する哲学的探求(1672)』

自然法とは「**共通善** Common Good, *bonum commune*」、すなわち人類全員の幸福を目的とした神の命令であり、その神の命令の実践が道徳である。この目的のため、人々には他者の幸福を望むという「**普遍的善意** Universal Benevolence, *benevolentia universalis*」が(神によって)与えられている。普遍的善意に従えば共通善がもたらされ、その結果各個人も最大の幸福を得られる。ただし、ここで言われている幸福とは、いわゆる精神的快樂であり、肉体的快樂は考慮の対象外である。

シャフツベリ[Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury 1671-1713]

主著:『人間、風習、意見、時代の諸特性(1711)』

「道徳 Moral」の問題は正確には「徳 Virtue」についての問題であり、徳とは行為そのものではなく、その背後にある行為者の内面や性格に関するものである。自分自身の幸福と同じく、他者の幸福が「**道徳感覚** Moral Sense」によって望まれ、個人の幸福と社会全体の幸福との調和のとれた追求という性格や動機こそが徳と呼ばれるものである。どのような徳が、どれほどの幸福を生むのかは「**反省的感覚** Reflexed Sense」によって分かる。

ヒューム[David Hume 1711-1776]

主著:『人間本性論(1739-40)』『道徳原理研究(1751)』

全ての徳と悪徳は、自分自身が感じる快苦か、**一般的観点** [General point of view]から見た他者が感じている快苦の「**共感** Sympathy」のどちらかに基礎づけられる。徳は「**人為的徳** Artificial Virtue」と「**自然的徳** Natural Virtue」に分類される。人為的徳とは「正義」や「貞節」など、社会や共同体という人工物を円滑に運営するために便利な「**効用** Utility」として間接的に快樂を生じさせる徳であり、自然的徳とは「機智」や「雄弁」など、社会を介さなくとも直接的に快樂を生じさせる徳である。道徳の問題は主として人為的徳の問題である。

スミス[Adam Smith 1723-1790]

主著:『道徳感情論(1759)』『国富論(1778)』

人は他者の行為を見たとき、自分がその立場であったならば行うであろう行為と、他者が実際行った行為とを比較し、それが一致すれば他者を是認し、著しく異なる場合には否認するという「**同感** Sympathy」という感情を持つ。また、人は他者からの是認を出来るだけ受け、否認を出来るだけ退けたいと欲求する。そのため、「自己の行為を評価する他者」を理想化した「**公平な観察者** Impartial Spectator」という存在が行為者の内面に想定され、公平な観察者によって是認される行為が道徳的と呼ばれる。